

青年期の自立にかかわる諸問題(3)

—大学生の成功回避動機と性役割認知—

Psychological problems in relation to the independence of adolescence (3)

—The relation between the motive to avoid success
and sex-role concepts in college students—

永 江 誠 司

(Seiji Nagae)

(1995年9月11日受理)

The purposes of this study were to examine sex differences in the motive to avoid success and to investigate the relationship between the motive to avoid success and sex-role concepts in college students. The following results were found. The motive to avoid success was differed between female and male students. Male students were higher than female students in the motive to avoid success scores. Female and male students higher in the motive to avoid success scale indicated the indeterminate sex-role (low femininity and low masculinity). Female students lower in the scale showed the androgynous sex-role (high femininity and high masculinity). Male students lower in the scale indicated the high masculine sex-role. These results were interpreted as supporting the hypothesis that the androgyny is positively related to the mental health.

Key words: the motive to avoid success, sex-role concept, sex difference, androgyny, college student.

Havighurst (1953) は、青年期において習得しなければならない発達課題として10項目をあげているが、その中に「社会的に責任のある行動を求め、それを成し遂げること」という達成動機にかかわる項目と、「男性としての、また女性としての社会的役割を達成すること」という性役割にかかわる項目がある。青年期の自立を支える上で重要な役割を果たすこれら2つの心理機能は、達成動機に性差の存在することが指摘されていることからわかるように(加藤, 1991; 宮本, 1981参照)、青年期において密接な関係をもって形成されていくことが考えられる。本研究では、この2つの心理機能が関係する問題の中で、成功回避動機(the motive to avoid success)と性役割認知との関係に焦点を当てて検討する。

永江(1992)は、女子青年の自立を困難にしている心理機制をシンデレラ・コンプレックスの観点から検討してきたが、この概念を提唱したDowling(1981)は、その理論的根拠の1つをHorner(1968, 1972, 1974)の成功回避動機にお

いている。このことについては、その後の研究によりシンデレラ・コンプレックスと成功回避動機が有意な正の相関を示すことから確認されている(落合, 1984; 田中, 1994)。Horner(1968, 1972, 1974)により女性に特有な動機として提案された成功回避動機は、達成動機にかかわる概念として位置づけられている。達成動機とは、優れたこと、あるいは困難なことをうまく成し遂げ、競争事態で人より優れた成績や業績をあげたいというような、ある高い基準に対して自己の力を発揮し、目標を成し遂げようとする動機のことをいう。この達成動機を説明する重要なモデルの1つに、Atkinsonのモデルがある(Atkinson & Feather, 1966)。彼の達成動機モデルとは、人がある目標を定めそれを達成しようとするときには、成功を求める成功接近動機(the motive to achieve success)と、失敗を恐れる失敗回避動機(the motive to avoid failure)があり、これら2つの動機によって人の行動は規定されるというものである。このモデルの失敗回避動機に対立する概念と

して、また達成動機にみられる性差を説明する概念として提案されたのが、成功回避動機なのである。

成功回避動機とは、「有能で達成動機の高い女性は、特に異性との競争場面において成功することを恐れて、それを回避してしまう」という女性に特有の動機のことをいう。成功回避動機をもつ女性は、成功を望まず失敗しがっているのではなく、「成功すること（知的な達成をすること）は女らしくない」とか「成功すると社会から拒絶されるのではないか」ということを予想するために不安を生み、達成動機との間でアンビバレンツな感情に支配されているのだと解釈されている。Horner (1968, 1972, 1974) による成功回避動機の測定は、文章を用いた投影法によって行われている。すなわち「アン（男性用はジョン）は一学期が終ったとき、医学部で1番の成績をとったことを知った」という刺激文を与え、被験者にその後の想像物語を作らせている。その物語の内容は次のような基準によって分析され、成功回避動機の強さが測定される。(a) 成功することによって社会的に拒絶され、友人を失ったり孤独感に悩まされたりするという不安がある。(b) 成功することに対する葛藤や罪悪感がある。(c) 成功の責任を否定する。(d) 刺激文の成功場面を否定し内容を変更する。

これらの基準によって分析した結果、男子学生では8%しか成功回避を示す物語を作成していなかったが、女子学生では実に65%が成功回避の物語を作成していたのである。明らかな性差がみられ、ここから成功回避動機が女性に特有な動機であることを Horner (1968, 1972, 1974) は強く主張したのである。すなわち、女性は一般的に達成への欲求をもたないわけではないが、それ以上に人から好かれたいとか、愛されたいという欲求を強くもっている。これは達成動機の高い女性でも例外ではなく、むしろそれ故に、彼女らは成功を求めようとする動機と、それを恐れ回避しようとする動機の強い葛藤状態におかれるのである。

Horner (1968, 1972, 1974) の研究以降、達成動機の研究は性差のあることを前提に検討がすすめられるようになり、成功回避動機の研究も精力的に行われるようになった。それらは、Horner (1968, 1972, 1974) の成功回避動機概念の再検討、投影法による測定法の検討、他の心理学的諸変数との関係についての検討、そして発達の検討など多領域にわたっている（青柳, 1987; 加藤, 1977参照）。その中で本研究では、成功回避動機

の形成が性役割の獲得過程と深くかかわっているという見解に着目して（山内, 1978）、特にその性差および性役割認知との関係について検討してみたい。

Hoffman (1974) は、刺激文の手掛り（例えば、達成領域、成功の事実を知る方法、競争事態の内容など）に変化をもたせた上で、Horner (1968) の研究の追試を行っている。その結果、成功回避動機が刺激文の手掛りの変化によって影響されないことを示している。そして、女子学生の成功回避動機の出現率が65%で Horner (1968) のそれと一致していたのに対し、男子学生の成功回避動機は77%と高く、Horner (1968) の8%とは大きく異なっていることを示している。Hoffman (1974) の研究は、成功回避動機が女性だけでなく男性でも存在することを示したことにおいて注目される。ただ、男女の成功回避動機の質的側面に着目すると、男性では成功することへの価値に対する懐疑が多いのに対し、女性では成功することによる社会的拒絶に対する不安の多いことが示されており、その内容に差のあることがわかっている。いずれにしても Hoffman (1974) の結果は、成功回避動機が女性特有のものであるとする Horner (1968, 1972, 1974) の主張とは大きく異なるものであった。

成功回避動機の性差を発達的に検討した斉藤・青柳・秋田・下垣外・吉岡 (1980) は、小学生と中学生では性差がなく、高校生でやや女子の成功回避動機が高くなり、大学生で明らかに女子が高くなることを報告している。これは女子が高校生の頃から女性の性役割期待を強く意識するからだと解釈されている。しかし、彼らはその後の一連の研究から男性にも成功回避動機が存在することを認めている（青柳・斉藤・細田, 1986）。さらに、藤岡・高橋 (1991) は高校生と大学生を対象とした研究において、どちらの年齢でも成功回避動機に性差のないことを報告している。以上のように、成功回避動機の性差については一義的な結果が得られておらず、したがってこの点は本研究でも確かめておかねばならない問題である。

次に、成功回避動機が女性に特有のものであるという Horner (1968, 1972, 1974) の提言を受け、女性の性役割志向と成功回避動機との関係を調べたものに Alper (1973, 1974) の研究がある。性役割志向尺度（Wellesley Role-Orientation Scale: WROS）で測定された結果から、性役割志向の高い女子学生（伝統的女性役割志向型）は低い女子学生に比べて、成功回避動機の高いことが指摘さ

れている。つまり、伝統的な女性役割を志向する女性は、何かを成し遂げることを女性には不適切なことと思っているが、志向していない女性は必ずしもそれを不適切とは思っていないことが示されている。この研究は、成功回避動機の強さが性別役割の女性性と深く関係していることを示唆しているが、その後も成功回避動機と性別役割との関係については、いくつかの研究で検討されている。

Gayton, Havu, Barnes, Ozman, & Bassett (1978) は、女子大生を対象にしてこの関係を検討した結果、男性性と女性性ともに弱い未分化型の女性および女性性の強い女性性優位型の女性は、男性性と女性性ともに強い両性具有型の女性および男性性の強い男性性優位型の女性より、成功回避動機が高いことを示している。これは、男性性と女性性をともに強くもつ女性の性別役割特性が、成功によってもたらされるマイナスの結果に対する不安を最小限に留める効果をもつことを示している、と解釈されている。つまり、成功からもたらされる女性の不快さは、彼女らが成功することを男性的行動とみなすことからきていると考えられ、そこから女性性とともに強い男性性をもつ両性具有型の女性は、成功からくる不安や恐怖を感じることが少ないと考えられるのである。これは、「強い女性性と男性性をあわせもつ両性型の性別役割は精神的健康と正の相関をもつ」とする Bem (1975) の仮説を支持するものといえる。

Major (1979) も女子大生を対象として Gayton et al. (1978) とほぼ同様の研究を行っている。その結果、両性具有型の女性が最も低い成功回避動機を示したが、男性性優位型の女性は、女性性優位型や未分化型の女性よりも有意に高い成功回避動機を示すことを報告している。男性性の強い女性で成功回避動機が最も高かったことについて Major (1978) は、この型の女性は成功をもたらすマイナスの結果についてより強く悩む傾向があり、また今以上に自らの女性性を失うことへの不安も高いからだとして解釈している。しかし、この型の女性は Gayton et al. (1978) の結果では最も低い成功回避動機を示しており、両研究の結果は大きく異なっている。

青柳ら (1986) は、女子学生の成功回避動機と性別役割の関係を検討し、男性性の弱さが高い成功回避動機と関係し、女性性とは関係しないことを報告している。また、藤岡・高橋 (1991) も高成功回避動機群が低成功回避動機群より男性性別役割特性を高く評価し、女性性別役割特性については両群に差のないことを示している。ただ、青柳ら (1986)

の性別役割評価は「現在の自分のイメージに適合するかどうか」として行われているのに対し、藤岡・高橋 (1991) では「男性あるいは女性にとってどの程度望ましいか」として行われている。したがって、前者は現実自己の性別役割評価であるのに対し、後者は男性あるいは女性一般としての性別役割評価といえ、その点で両者は性別役割特性の異なる側面を測定しているといえる。

以上、成功回避動機と性別役割との関係についても、一義的な結果が得られていないことがわかる。理由はいくつか考えられるが、その1つに成功回避動機の測定法の問題がある。成功回避動機の測定は、文章による投影法を用いたものと (Alper, 1973; Major, 1979)、質問項目を用いた評価尺度法によるものがある (青柳ら, 1986; 藤岡・高橋, 1991; Gayton, et al., 1978)。両者が概念的に同じものを測定しているかどうかについては疑問も出されているが (青柳, 1987)、一般にはより客観的測定法とされる評価尺度法が多く使われている。その中で、Zuckerman & Allison (1976) の尺度は、多くの研究でよく用いられているものである。そこで、本研究でもこの尺度を改良して標準化されたものを使用する。

次に、性別役割の測定法の問題がある。性別役割の測定には評価尺度法が用いられているが、多様なものが使用されている。女性の性別役割志向を測定する尺度 (WROS) を用いたもの (Alper, 1973)、Bem (1974) による男性性、女性性を測定する尺度を用いたもの (Gayton et al., 1978; Major, 1979)、それに柏木 (1972) による性別役割期待を測定する尺度を用いたもの (藤岡・高橋, 1991)、などである。性別役割については、近年、男性性と女性性を単次元の両極にあるものとする考え方から、両者を相互に独立した次元とみなし、例えば男性性の強いことが必ずしも女性性の弱いことを意味しないとする考え方に変ってきている (Bem, 1974; Heilbrun, 1976)。青柳ら (1986)、Gayton et al. (1978)、Major (1979) の研究は、このような性別役割研究の流れを受けたものといえる。この点で、性別役割特性を女性性、男性性、人間性の3側面から標準化した伊藤 (1978) の尺度は、Bem (1974) のそれに近いものであり、本研究の性別役割測定尺度として有効なものであると考えられる。

さらに性別役割の測定に関連して、その評価をどのような視点に立って行わせるか、という問題がある。例えば、性別役割を評価させるときに、現実自己について評価させると (青柳ら, 1986;

Gayton et al., 1978; Major, 1979), 男性, 女性一般として評価させるのと (藤岡・高橋, 1991) では, 答えられた性役割の内容は同じものとはいえないだろう。本研究では, 個人の成功回避動機が自己の性役割認知とどのようにかかわっているかを検討することから, 前者の性役割評価の視点に立った回答を求めることになる。ただ自己評価を行う場合, 現実自己の評価と理想自己の評価は異なることが, Wicklund (1975) によって指摘されている。そこで, 本研究では性役割の自己評価をこの2つの視点から求め, 成功回避動機との関係を検討してみたい。

最後に, これまでの成功回避動機と性役割との関係をみた研究では, 女性のみを被験者としたものが多く (青柳ら, 1986; Alper, 1973; Gayton et al., 1978; Major, 1979), 男女を被験者としたものが少ない (藤岡・高橋, 1991), という問題がある。すでに成功回避動機の性差がついて考察してきたが, そこではこの動機が女性のみでなく男性にも存在するという見解が出されていた。そこで, 本研究では男女の大学生を被験者として, 成功回避動機と性役割との関係を, それぞれの性の視点から検討する。

以上の議論より, 本研究では大学生の男女を被験者とし, 標準化された評定法によって成功回避動機を測定し, そこに性差があるかどうかについて検討する。さらに, 成功回避動機の高い者と低い者との間に, 自己の性役割認知において差異がみられるかどうかを, 現実自己と理想自己の側面から検討する。

方 法

被験者

調査の対象となる被験者は, 福岡教育大学に在籍している238名 (女子119名, 男子119名) であった。

調査の内容

調査は質問紙法によった。質問紙は, 成功回避動機測定尺度と性役割認知測定尺度からなっている。以下, これら2つの尺度の内容について説明する。

成功回避動機測定尺度 Zuckerman & Allison (1976) の成功恐怖尺度 (Fear of Success Scale: FOSS) の27項目を参考にして, 斉藤ら (1980) が作成した成功回避動機測定尺度のうち, 内的整

Table 1 成功回避動機測定尺度

競争心のなさ

1. 勝負に勝ったり, 課題を立派にやることが自分の価値を認めさせる唯一の方法だと思う
2. 最高の成績を修めれば, 道は開けると思う
3. ゲームに勝つことより参加することの方が大切である
4. どんな競争でも勝とうと思う
5. トップになると, 人は尊敬してくれると思う

成功の代償

6. 何かを他人よりうまくやろうとすると, 多くの友達を失うかもしれないと思う
7. 成功者というものは, さびしく孤独なことが多いと思う
8. 成功によって失うものは, しばしば, 成功によって得るものより多いと思う
9. 成功すると, 非常に大きな責任をしょいこむことになると思う

優越欲求の弱さ

10. 物ごとをやりとげると, 他人から尊敬されると思う
11. 他人に自分の可能性を十分に評価してもらいたいと思う
12. 他人よりうまくできると, 大変うれしく思う
13. 自分の成功談を友達に話すのは楽しい

成功の否定的感情

14. トップにいと, 責任感で心が休まらないと思う
15. 人の行いは, 成功した後のの方が悪くなると思う
16. 成功した人は, 冷淡で気ど屋だと他人から思われると思う

成功ゆえの羞恥心

17. 他人と競争する場合, 勝った時よりも負けた時の方が, 後味がよいことが多い
18. 他人に自分のしたことをほめられるときまり悪い

合性の得られた18項目を使用した。その内訳は, 「競争心のなさ」因子の5項目, 「成功の代償」因子の4項目, 「優越欲求の弱さ」因子の4項目, 「成功の否定的感情」因子の3項目, 「成功ゆえの羞恥心」因子の2項目であった (Table 1 参照)。これらの項目はランダムな順序に配列され, それぞれ「そう思う」, 「ややそう思う」, 「どちらでもない」, 「ややそう思わない」, 「そう思わない」の5段階尺度で評定された。成功回避動機を強く方向づけている評定に対しては5点, 逆の方向づけに対しては1点が与えられた。したがって, 個人の尺度得点の分布は90点から18点にわたっている。

Table 2 性役割認知測定尺度

女性性	男性性	人間性
1. かわいい	11. 冒険心に富んだ	21. 忍耐強い
2. 優雅な	12. たくましい	22. 心の広い
3. 色気のある	13. 大胆な	23. 頭の良い
4. 献身的な	14. 指導力のある	24. 明るい
5. 愛嬌のある	15. 信念を持った	25. 暖かい
6. 言葉使いの丁寧な	16. 頼りがいのある	26. 誠実な
7. 繊細な	17. 行動力のある	27. 健康な
8. 従順な	18. 自己主張のできる	28. 率直な
9. 静かな	19. 意志の強い	29. 自分の生き方のある
10. おしゃれな	20. 決断力のある	30. 視野の広い

性役割認知測定尺度 伊藤(1978)が作成した性役割認知測定尺度の30項目を使用した。尺度の内訳は、「女性性」、「男性性」、「人間性」がそれぞれ10項目ずつとなっている(Table 2)。これらの項目はランダムな順序で配列され、それぞれ「あてはまる」、「ややあてはまる」、「どちらともいえない」、「ややあてはまらない」、「あてはまらない」の5段階尺度で評定された。それぞれの性役割特性の認知を強く方向づけている評定に対しては5点、逆の方向づけに対しては1点が与えられた。したがって、個人の尺度得点の分布は3つの特性ごとに50点から10点にわたっている。性役割認知測定尺度では、(a) 現実自己と (b) 理想自己の視点から、それぞれ評定することが求められた。

調査の手続き

調査は、調査者が被験者に直接内容を説明し、回収する方法をとった。教示は次のように行われた。「質問紙は2種類あります。第1の質問紙は、成功することに対する評価について答えてもらうものです。それぞれの項目について、どの程度思うか考えて答えて下さい。第2の質問紙は、性役割すなわち女らしさ、男らしさについてあなたの考えをお聞きするものです。それぞれの項目が、(a) 現実の自己にどれだけあてはまると思うか、(b) 理想的な自己にどれだけあてはまると思うか、を判断して評定して下さい。」

調査の時期

調査は、1993年10月下旬に実施された。

Table 3 男女別平均成功回避動機尺度得点

因子	女子	男子
第1因子 (競争心のなさ)	15.92	15.67
第2因子 (成功の代償)	10.75	10.95
第3因子 (優越欲求の弱さ)	8.48	9.35
第4因子 (成功の否定的感情)	8.35	8.26
第5因子 (成功ゆえの羞恥心)	4.38	4.36

結 果

成功回避動機測定尺度の分析

男女別に成功回避動機尺度の得点を示したものがTable 3である。総得点についてt検定を行ったところ性差がみられ ($t_{(236)} = 2.88, p < .01$)、男子が女子より成功回避動機得点が高かった。さらに、因子別に性差を検討したところ、第3因子(優越欲求の弱さ)のみで有意差がみられ、男子が女子より得点が高かった ($t_{(236)} = 5.97, p < .01$)。したがって、男女の成功回避動機の差は特に優越欲求の弱さにおいて顕著であることが示唆された。

次に、男女それぞれの成功回避動機総得点の平均値から1/2 SD 以上得点の高い被験者を成功回避上位群、1/2 SD 以上得点の低い被験者を成功回避下位群とし、該当する被験者の中から上位群、下位群それぞれ30名ずつを抽出した。これらの被験者の平均成功回避動機得点を示したものがTable 4である。この資料に対し、性×成功回避強度の2要因の分散分析を行った結果は次のとおりである。主効果として、性については有意差がみられなかった。成功回避強度については有意差がみられ ($F_{(1,116)} = 532.26, p < .01$)、成功回避上位群が下位群より得点が高かった。交互作用は有意ではなかった。これにより、成功回避動機の

Table 4 男女の成功回避動機強度別得点

	成功回避上位群	成功回避下位群
女 子	58.23	38.43
男 子	57.63	39.77

Table 5 男女の成功回避強度・性役割評価・性役割特性別の性役割認知得点

	女 子				男 子			
	成功回避上位群		成功回避下位群		成功回避上位群		成功回避下位群	
	現実自己	理想自己	現実自己	理想自己	現実自己	理想自己	現実自己	理想自己
女性性	25.27	37.07	29.70	39.30	27.43	33.87	26.97	34.30
男性性	28.07	41.37	31.87	43.33	28.10	42.27	31.97	45.23
人間性	30.63	44.50	34.50	46.40	30.56	43.03	36.37	46.50

上位, 下位のレベルが男女で等質であることが確認された。

成功回避動機強度と性役割認知

男女の成功回避上位群と成功回避下位群別に性役割認知測定尺度の結果を, 現実自己と理想自己ごとに示したものが Table 5 である。女性性, 男性性, 人間性の性役割特性ごとに性(女子, 男子)×成功回避強度(上位群, 下位群)×性役割評価(現実自己, 理想自己)の3要因の分散分析を行った結果は, 次のとおりである。

女性性得点の分析 Tabel 5 の女性性得点に対する分析の結果, 性に有意差がみられ ($F_{(1,116)} = 5.99, p < .05$), 女子が男子より有意に高く女性性を評価していた。成功回避強度に有意差の傾向がみられ ($F_{(1,116)} = 3.43, p < .10$), 成功回避下位群が上位群より女性性を高く評価する傾向がみられた。性役割評価についても有意差がみられ ($F_{(1,116)} = 293.81, P < .01$), 理想自己の女性性が現実自己の女性性より有意に高く評価されていた。さらに, 性×成功回避強度の交互作用に有意な傾向がみられた ($F_{(1,116)} = 3.50, p < .10$)。これは, 女子の成功回避下位群が上位群より女性性を高く評価しているのに対し, 男子では両群に差のないことによっている。ちなみに, この傾向は理想自己より現実自己でより強いことが下位検定で示されている。また, 性×性役割評価の交互作用が有意であった ($F_{(1,116)} = 13.84, p < .01$)。これは, 理想自己の女性性が男子より女子で高いのに対し, 現実自己の女性性では男女で差のないことによっている。ちなみに, このことは成功回避下位群より上位群でより強いことが示されている。その他の交互作用は有意ではなかった。

男性性得点の分析 Table 5 の男性性得点に対する分析の結果, 成功回避強度に有意差がみられ ($F_{(1,116)} = 11.47, p < .01$), 成功回避下位群が上位群より有意に高く男性性を評価していた。性役割評価についても有意差がみられ ($F_{(1,116)} =$

380.77, $p < .01$), 理想自己の男性性が現実自己の男性性より有意に高く評価された。性については有意差がなかった。交互作用は全て有意でなかった。

人間性得点の分析 Table 5 の人間性得点の分析の結果, 成功回避強度に有意差がみられ ($F_{(1,116)} = 27.05, p < .01$), 成功回避下位群が上位群より有意に高く人間性を評価していた。性役割評価についても有意差がみられ ($F_{(1,116)} = 420.23, p < .01$), 理想自己の人間性が現実自己の人間性より高く評価されていた。性については有意差がなかった。さらに, 成功回避強度×性役割評価の交互作用に有意な傾向がみられた ($F_{(1,116)} = 3.32, p < .10$)。これは, 現実自己の人間性得点が成功回避上位群より下位群で高いのに対し, 理想自己の人間性得点では両群の差がやや小さくなっていることによっている。

考 察

本研究の主要な結果は, 次のとおりである。(1) 成功回避動機の性差がみられ, 男子が女子より高かったが, それは特に優越欲求の弱さに関してのみみられた。(2) 女子の成功回避上位群は下位群より自らの女性性を低く評価していたが, 男子ではこのような差はみられなかった。この傾向は現実自己評価でより顕著だった。(3) 男女とも成功回避上位群は下位群より, 自らの男性性を低く評価していた。(4) 男女とも成功回避上位群は下位群より, 自らの人間性を低く評価していた。

成功回避動機について, 全体得点で男子が女子より高い傾向を示し, 特に優越欲求の弱さに関して高い得点を示した結果は, 女子の成功回避動機が高いことを示した Horner (1968) や斉藤ら (1980) の結果とは一致せず, 性差がないかあるいは男子でやや高い結果を示した Hoffman (1974) や藤岡・高橋 (1991) の結果と一致している。本研究の結果は, 少なくとも男子も女子と

同じように、あるいは部分的には女子以上に成功回避動機をもつことを示している。男女とも競争心のなさ、成功への代償の不安、成功への否定的感情、そして成功への羞恥心の諸要因で差はなく、ただ優越欲求の弱さにおいて男子の得点が高くなっている。つまり、男子は女子より「物ごとをやりとげると他人から尊敬される、とは思わない」、「他人に自分の可能性を十分に評価してもらいたい、とは思わない」、「他人よりうまくできると大変うれしい、とは思わない」、「自分の成功談を友達に話すのは楽しい、とは思わない」と考える傾向が強かったのである。

Hoffman (1974)は、男女で成功回避動機に差がなくても質的には違いのあることを指摘しており、女子では成功することによって親和的な関係が失われるのではないかという不安が強いのにに対し、男子では成功することの価値について様々な疑問をもつことが多いとしている。本研究の結果は、少なくとも男子の成功回避動機が、Hoffman (1974)の言うように成功することの価値に対する懐疑というところに、その特徴があるといえるのではなからうか。いずれにしても、成功回避動機は Horner (1968, 1972, 1974) が指摘したように女子に特有な動機とはいえず、男女に共有された動機として考えられるものといえるだろう。Bem (1974)の指摘しているように、男性役割と女性役割を対照的なものとして区別してとらえる伝統的な性役割観が有効性を失った現代社会において、女性における男性役割への積極的評価と、男性における女性役割への否定的評価の減衰によって、両者の性役割観が以前に比べて接近しつつあることが、この結果を導いた理由の1つと考えられるのではなからうか。

次に、成功回避動機と性役割認知との関係について男女別に検討してみたい。まず、女子の成功回避動機上位群は下位群に比べると、自らの女性性と男性性、さらに人間性も低いと認知している。また、男子の成功回避動機上位群は下位群に比べると、自らの男性性と人間性は低いと認知しているが、女性性については同じ程度に低いと認知していた。ここから考えると、女子の高い成功回避動機は女性性、男性性ともに弱い未分化型の性役割と関係しており、逆に低い成功回避動機は女性性、男性性ともに強い両性具有型の性役割と関係していることがわかる。一方、男子の高い成功回避動機は男性性、女性性ともに弱い未分化型の性役割と関係しており、この点で女子と似ているが低い成功回避動機は男性性優位型と関係している

ことがわかる。以上の結果は、現実自己評価においてより顕著に現われていたが、理想自己評価でも得点のレベルが現実自己評価より高いことを除けば、その基本パターンは同じであった。

本研究の女子の結果は、女性の高い成功回避動機が未分化型の性役割と関係しているとした Gayton et al. (1978) の結果を支持しており、男性性優位型と関係しているとした Major (1979) の結果、強い女性性と関係しているとした Alper (1973, 1974) の結果、そして弱い男性性のみと関係しているとした青柳ら(1986)の結果とは異なっている。さらに、本研究の男子の結果は、これまでの研究で比較するものはないが、女子と同じ未分化型の性役割が高い成功回避動機と関係していることを示している。これらのことは、成功によってもたらされるマイナスの結果に対する不安や恐怖は、未分化型の男女の弱い男性性と女性性ではうまく抑えられないと解釈される。また、両性具有型の女子はその強い男性性と女性性によってこれらの不安や恐怖を抑えることができ、そしてまた男子では強い男性性のみによってそれらを抑えることができると考えられる。

Bem (1975) は、強い男性性と女性性をあわせもつ両性具有型の性役割は精神的健康と正の相関をもつこと、また Spence, Helmreich, & Stapp (1975) は男性性も女性性も弱い未分化型の性役割は低い自己評価 (self-esteem) と関係していることを報告している。本研究の男女における高い成功回避動機と性役割との関係は、少なくともこれらの仮説に適合する結果といえるだろう。男女とも、高い成功回避動機は未分化型の性役割と深く関係していたからである。このことは、高い成功回避動機が弱い人間性特性と関係していたことから支持されるだろう。この特性は、男女ともにかかわる共有されるべき性役割であり、両性具有型の性役割として高く評価されるものだからである。

永江 (1992) によるシンデレラ・コンプレックスと性役割認知との関係についての研究では、シンデレラ・コンプレックスの高い女性は、現実自己、理想自己ともに弱い女性性と男性性をもつこと、低い女性は強い男性性をもつことを指摘している。また、永江 (1994) によるピーター・パン・シンドロームと性役割認知との関係についての研究では、ピーター・パン・シンドロームの高い男性性は男性性も女性性も弱いこと、低い男性性は男性性が強いことを指摘している。高い成功回避動機をもつ男女の性役割が、男性性、女性性ともに弱

い未分化型のものであったことから考えると、成功回避動機の強度は女性のシンデレラ・コンプレックスと男性のピーター・パン・シンドロームに、それぞれ深く関係していることが考えられる。すでに、成功回避動機とシンデレラ・コンプレッ

クスが正の相関をもつことが報告されているが(落合, 1984; 田中, 1994), このことは成功回避動機とピーター・パン・シンドロームとの間にも十分想定されることである。

引用文献

- Alper, T. G. 1973 The relationship between role orientation and achievement motivation in college women. *Journal of Personality*, 41, 9-31.
- Alper, T. G. 1974 Achievement motivation in college women: A new-you-see-it-now-you-don't phenomenon. *American Psychologist*, 29, 194-203.
- 青柳 肇 1987 成功回避動機に関する研究 その12—総括と今後の問題点— 立川短大紀要, 20, 11-22.
- 青柳 肇・斉藤浩子・細田一秋 1986 成功回避動機に関する研究(その11)—女子学生の性役割と社会態度との関係— 立川短大紀要, 19, 31-35.
- Atkinson J. W., & Feather, N. T. (Eds). 1966 *A theory of achievement motivation*. New York: Wiley.
- Bem, S. L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162.
- Bem, S. L. 1975 Androgyny vs. the tight little lives of fluffy women and chesty men. *Psychology Today*, 9, 58-62.
- Dowling, C. 1981 *The Cinderella complex: Women's hidden fear of independence*. New York: Summit Books. 柳瀬尚紀(訳) 1989 シンデレラ・コンプレックス—自立にとまどう女の告白 三笠書房
- 藤岡秀樹・高橋久美子 1991 成功回避動機についての研究 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター紀要, 1, 145-164.
- Gayton, W. F., Havu, G., Barnes, S., Ozman, K. L., & Bassett, J. 1978 Psychological androgyny and fear of success. *Psychological Reports*, 42, 757-758.
- Havighurst, R. J. 1953 *Human development and education*. New York: Longmans, Green and Co.
- Heilbrun, A. B. 1976 Measurement of masculine and feminine sex role identities as independent dimensions. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 44, 183-190.
- Hoffman, L. W. 1974 Fear of success in males and females: 1965 and 1971. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 353-358.
- Horner, M. S. 1968 Sex differences in achievement motivation and performance in competitive and non-competitive situations. Unpublished doctoral dissertation, University of Michigan.
- Horner, M. S. 1972 The motive to avoid success and changing aspirations of women. In J. M. Bardwick (Ed.), *Readings on the psychology of women*. New York: Harper & Row.
- Horner, M. S. 1974 The measurement and behavioral implications of fear of success in woman. In J. W. Atkinson & J. O. Raynor (Eds.), *Motivation and achievement*. New York: Wiley, pp. 91-117.
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26, 1-11.
- 柏木恵子 1972 青年期における性役割の認知 教育心理学研究, 20, 48-59.
- 加藤千佐子 1977 成功回避の動機に関する研究の動向 日本女子大学紀要家政学部, 29, 9-14.
- 加藤千佐子 1991 達成動機・失敗回避・成功回避 宮本美沙子(編) 新・児童心理学講座7 情緒と動機づけの発達 金子書房, pp. 135-181.
- Major, B. 1979 Sex-role orientation and fear of success: Clarifying an unclear relationship. *Sex Roles*, 5, 63-70.
- 宮本美沙子 1981 やる気の心理学 創元社
- 永江誠司 1992 青年期の自立にかかわる諸問題(1)—シンデレラ・コンプレックスと女性の自立 福岡教育大学紀要, 41, 第4分冊, 309-317.
- 永江誠司 1994 青年期の自立にかかわる諸問題(2)—ピーター・パン・シンドロームと男性の自立 福岡教

- 育大学紀要, 43, 第4分冊, 313-322.
- 落合幸子 1984 人生の転換期の心理Ⅳ－女性の中のシンデレラ・コンプレックス 常盤学園大学研究紀要, 5, 117-125.
- 斉藤浩子・青柳 肇・秋田真理・下垣外直子・吉岡玲子 1980 成功回避動機に関する研究 その1. 一発達の検討－ 立川短大紀要, 13, 53-59.
- Spence, J. T., Helmreich, R., & Stapp, J. 1975 Rating of self and peer on sex role attributes and their relation to self-esteem and conception of masculinity and femininity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 29-39.
- 田中 彩 1994 シンデレラ・コンプレックスの構造－特性不安・成功恐怖・役割受容・自我同一性地位との関係から－ 追手門学院大学心理学論集, 2, 21-30.
- Wicklund, R. A. 1975 Objective self awareness. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 8. Orlando: Academic Press. pp. 233-277.
- 山内弘継 1978 成功回避の動機づけと因果帰着の関係 同志社大学紀要人文学, 133, 75-102.
- Zuckerman, M., & Allison, S. N. 1976 An objective measure of fear of success: Construction and validation. *Journal of Personality Assessment*, 40, 422-430.